

公開月例研究会講演記録〈第 271 回 (2012. 11. 20)〉—

「東日本大震災後の復旧・復興における NPO と復興企業の役割」

NPO 法人いしのみき環境ネット代表理事

高橋 寿

皆さん、こんばんは。

私、今ご紹介いただいた通り、本業は畳屋で、こんなに大勢の皆さんの前で話をする体験はございませんので、大変緊張しております。長い時間続けてお話ししたこともあまりないので、パワーポイントの写真を見ながらお話しさせていただきます。

(資料 1) 石巻は 1 市 6 町が合併して新しい石巻市になりましたが、これは被災前の旧石巻中心市街地です。海があって、手前に市街地、さらに手前にある北上川が蛇行して海に注いでいる姿が見えますが、ここに写っている市街地は全部水没しました。

正面に小さな山がありますが、その山の陰が南浜町と申しまして、津波の被害が一番大きかった場所です。この山の上に立つと分かりますが、ほとんど建物は残っておりません。700 戸ほどあった住宅は影も形もない状況です。

右のピンクの建物は石巻駅前に移転した市役所です。ピンクの市役所というのは珍しいと思いますが、震災前、閉店したデパートを作りかえて市役所にしたもので、中にエスカレーターもありますし、1 階にはスーパーも入っています。

さっきとは逆方向からの写真です。浸水地域マップで、赤いところが水没しております。先程申しました南浜町の海側から約 1km は建物が全くなくなった場所で、そこから奥は波が減殺されて水位だけが上がったところです。川沿いも流されています。この中に赤い星が二つありますが、上は私の会社のある場所、下は私の住まいのある場所で、直線距離で 13km のところを車で約 30 分かけて毎日通勤しています。

右下の浸水地域が南浜町で、先程見えた小さな山は日和山といいます。この間を北上川が蛇行し

ながら流れています。北上川は右上の浸水地域の上の方から新北上川と旧北上川の二つに分かれています。石巻の河口に流れてくるのが旧北上川で、こういう地形になっております。

写真を撮ったのは緑色の点の場所で、今後ここにまつわる写真がいろいろ出てきますので、この地図をよく見ておいてください。

北上川河口の震災前の写真です。この橋が日和大橋といって、水面からの高さが 30m ぐらいあります。これが市立病院、その隣が文化センター、その他の建物はほとんどなくなりました。この緑地帯が高台の日和山になります。

翌日の朝です。河口から 2km ぐらい上流で、左から津波が流れ込んでいます。奥が日本製紙の大きな工場です。この日は大変寒くて、雪が降っていました。避難された方々も水に漬かりながら一晩過ごしたとか、車も津波で流されてきていますが、この中にももしかしたら人がいるかもしれません。

津波の当日、南浜町の門脇小学校のある地域で、津波によって流されたガスボンベに着火して、見る見るうちに火が広がって町が焼かれました。

門脇小学校です。2011 年末の NHK 紅白歌合戦で長渕剛が歌った場所です。よく見てください。車が何台も潰されているのが分かると思います。この校舎からすぐ近くの裏山に校舎から仮設の橋を架けまして、校舎に逃げ込んだ方々はその橋を伝って裏山に逃げましたので、この学校の中で亡くなった方はいないと聞いていますが、この学校まで流されてきた車の中で亡くなった方はたくさんいます。その場所で歌うというのはどうなのかなと私は思いながらあの番組を見ていたんですけどもね、こんな状況でしたから。

(資料2) 市立病院と文化センターの見える場所です。私の家もここから車で5分ぐらいの場所ですが、この悲惨な場所には震災から半年経っても行きたくありませんでした。怖いというか、そこであったことを想像しながら現実の状況を目の当たりにすると、いたたまれない気持ちになりました。

ところが、今年になって、電気工事屋さんがうちの会社に仕事に来てくれました。私の会社も被災しましたので、電気工事やいろいろな工事業者さんに入ってもらっているわけです。その電気工事屋さんは南浜町の市立病院の裏に住んでいて、行政区長さんをされていた方です。仕事の合間にお茶のみ話をしているうちに、「昨日、気持ちいい場所に行って来たんです。孫と娘夫婦と私たち夫婦の家族5人でバーベキューをしてきたんですよ」と言うんですね。「それはよかったですね。どこまで行ってきたんですか」と聞いたら、「いや、俺の家の近くの市立病院の裏の駐車場なんですよ」。

えーっと思いました。もちろん今ここはほとんど何もなくなって更地のようになっています。幾ら更地になったとはいえ、そこでバーベキューするという心境を私には一瞬理解できませんでした。でも、ここに住んでいた人にはここがふるさとですから、ふるさとでバーベキューするというのは当たり前なのです。

外部の人間からしたら、こんな気持ちの悪い場所ないですよ。津波にのまれ、火に巻かれて、1000人以上の人がここで亡くなっているのです。その駐車場でバーベキューする気になるだろうかと思いましたがけれども、その人にはそこがふるさとなのです。これから復旧復興にかかわるときに、その心境を考える事ってすごく大事だなと思いました。

被災前の南浜町です、市立病院のここでバーベキューをしたわけです。

被災から1ヵ月ちょっと経ったときで、片づいたように見えますけれども、実は片づける前の写真です。茶色に見えるのは津波が運んできた砂、土で、まだ瓦礫の山はありません。その後、30mぐらいの瓦礫の山が幾つかできて、今ではだいぶ片づきましたけれども、まだまだ残っています。それとこの地域全体が1m以上、地盤沈下してい

ます。

ここを今後どういうふうに復興していくかという、海沿いに7mの堤防を作り、川沿いにも堤防を作る計画になっています。ここを国営の被災地公園にしようという話し合いもいま持たれていますが、1年半経つのに、いつからやるか、具体的な計画はまだ何も上がってきません。

この前やっとな、我々の仲間の主催で住民との話し合いが持たれて、ここをどんな風にしたいか、門脇小学校をどうしたいかという話もしました。当初、県や国はここに「鎮魂の森」を作ると言っていましたが、ここの西光寺の住職がその会の中に入っておられて、「なんで鎮魂なんだ。鎮魂というのは荒ぶる魂を鎮めるという意味があるんだ。うちの檀家さんとか檀家さんの家族で亡くなった人たちは荒ぶってないぞ。荒ぶる魂とはなんだ。鎮魂ではなくて慰霊だろう。鎮魂という言葉は二度と使って欲しくない」と彼は力説しておりました。そんなことでこの計画はまだまだこれからで、住民の方々との話し合いを深めて、この地域に住む人たちの気持ちをまとめた上での計画が大事だと思っています。

これは石ノ森章太郎さんを記念してつくられた石ノ森萬画館です。この川を遡って行くと、さっきの山が先の方にあります。内海橋という二つの橋で中州をつないでいて、赤い建物が岡田劇場です。震災前は映画館になっていましたが、昔は演劇をやったり美空ひばりさんが公演されたこともあります。この森のところに木造の教会があって、他の建物は全部流されたのに、なぜか教会だけは残った。神がかり的だなと思っていましたが、建築に詳しい方に言わせると、たまたま1階が抜かれて、そこを水が流れたからだという解説をされていました。建物は今も建っています。

私の母親の住んでいる実家は全壊しましたけれども、私自身の身体的には震災の直接的な被害をあまり受けず、水没して建物を直すというような経験はしていませんでしたので。震災の翌日から、被災した友人、知人を尋ねて街中を歩き回りました。

これは2日目、こちらが街側で、先程の写真の対岸がこちら側になるんですけれども、対岸から2本目の橋を渡ってここまで来たとき、橋の上のこの船にはしごが架かっていましたので、はしご

を上って船の甲板を通過して、反対側のはしごを使って傾いた舟の甲板をおりて街中に入っていました。

なぜそういう経路をとったかという点、最初に見てもらったように街中はまだ水没しているため、堤防沿いに来るしかここまで歩いてくることはできなかった。水が引いたとは言え、先程茶色に見えた南浜町にはこのようなヘドロがいっぱいでした。日本製紙の古紙が水に溶けて街中に流れ込んでおりましたので、ヘドロを片づける時にも、紙をはがすようにヘドロを取ったという状況です。

(資料3)これが市役所です。ここにちょっと見えているのは石巻駅です。日影の形からしてたぶん翌朝の9時か10時ぐらいの写真ですが、駅前には海から見ると日和山の陰になっていて、旧市街地の中心になります。水位は深いところで1階の天井下ぐらい、浅いところでも腰ぐらいまでありました。

市役所の中には住民の方がずいぶん避難していましたが、水が引くまで外に出られません。1階にスーパーが入っていましたので、そこを食糧基地にして食料品を調達しています。食料代は市役所が後から支払ったようです。市長はたまたま外部に出張して、3日目か4日目にやっと市役所に来たんですけど、この時点ではまだ日赤病院におりました。

この車と比べて見ると、水位はたいしたことないように見えます。市役所も同じぐらいの水位だったのですが、外に出られない。気温が低くて、濡れると体温が下がりますから、水にひたってまで逃げたいと思える状況ではなかったわけです。

最後には事務所の本を並べて、その上に橋を架けて高台まで逃げるといった方法で、なんとか市役所の方々が外に出て活動することができるようになりましたが、それまで市役所の中にいる方々は一歩も出られない状況でした。

これは昨日撮ってきた写真です。前の写真と同じ場所です。市役所があって、普段はこんな状況です。

水没最前線となった新橋という場所です。私は翌日、実家から途中まで車で、そこからここまで歩いて来ました。この先にある陸橋に避難した人や、車に残った人、自宅の2階に避難して助けを

求めている人達を、自衛隊が船を使って一生懸命水のないところまで運んでいる状況です。

私はここから自宅に行こうと思いましたが、濡れないで行く事は出来ませんでしたので、堤防沿いに仙石線の線路まで行って、線路伝いに行けば大丈夫かなと思って歩き始めました。最初は膝下で順調に行けたのですが、途中、津波で削れて水没していたところに全く気づかずに深みにはまり胸まで水に漬かって、まあいいやと諦めて、そこからは水の中を漕いで自宅まで帰りました。

たまたまうちの近所を河北新報の方が撮ってくれたものです。ここから200mほど入ったところが山の登り口になるんですが、屋根の下まで水が来ています。車は全部流されてきた車で、この中に人がいる可能性もあります。車の片づけは自衛隊の方が一生懸命やってくれました。車のドアやボンネットに赤いペンキで「×」を付けてあるのは、「中に人がいるよ。後から出さなきゃいけないよ」というマークです。

2~3日経った、我が家から歩いて2~3分のところ。水は腰ぐらいの高さですが、陸橋のずっと先では屋根の上まで水が来たところもあります。

大街道という、直線で4~5kmぐらいの両側に自動車屋さんとかいろいろ商店が立ち並ぶ通りで、私も最初はここを通過して自宅まで帰ろうかと思いましたが、水が深そうだったので、こっちは諦めて別ルートをとりました。これは3日目ぐらいだと思いますが、翌日の水位があるところを無理して水をこいで帰った人は、浮いている人をよけながら帰ったという話です。

震災前と震災後でどうなったかといいますと、映画館はない。教会は残っていますが、ほかの建物は壊れた状態です。ここも一見被害がないように見えますけれども、このへんの建物はほとんど取り壊しになっています。

私がさっき歩いて船を乗り越えてきたところを反対から写した写真です。被災地の片づけや整備作業をしやすくするために、まず道路を確保する。自衛隊が翌日から大型の重機を持って入ってきて整理してくれましたが、実はこの車も船も流されてきたものです。

この下流にある料理屋の女将さんと知り合いで、「震災のとき、どうでした?」と言ったら、「自

分達は建物の2階にいて、なんとか助かったけど、今、私の店の前にはヨットあるのよね」と言うのです。玄関にヨットがあるというものなのかと思いましたが、それも笑って言えるぐらいというか、笑うしかない、そんな状況です。

これが片づいた状況と言っていいんだろうと思います。道路はちゃんと車がすれ違えるようになりましたけれども、そばの車は重ねて仮置き状態です。ここにブルーシートがあるのは、水に押されて1階が水没した建物です。車が並んでいますけれども、水没して動きません。全部廃棄処分です。

ここまでの被災後の状況ですが、この後、我々の団体についてお話しさせていただきます。

いしのまき環境ネットは、冒頭ご紹介いただきましたように、それぞれが仕事をやりながらボランティア活動をするという事から始まりました。専属に近い方は一人だけおられますけれども、ほかは全部、自分で仕事を持ちながらの全くのボランティア活動で、NPO法が施行された後、仕事をしやすくするためにNPO法人に申請して、2005年6月に公認の団体になりました。同じ2005年2月16日という日を皆さん覚えていますか。京都議定書が発効された日です。

我々の団体の理念は「石巻から元気な地球を次世代の子どもたちへ」という、これだけの言葉ですが、結構時間をかけて決めました。環境に貢献できるような団体をこの石巻から始めようということで、主に企業人、企業の経営者の方々が集まって作った団体です。

NPO法が施行されてから、NPO法人にさえなれば、NPOに対していろいろな補助金が下りるだろうという期待を持ってNPO法人になった団体がいくつかありました。その中には、法人になって1年も経たないうちに法人を取りやめたところも出てきました。自主財源を作る力もなく、補助金を当てにして、NPO法人になればなんとか維持できるというのは全く幻想だということに気づかなかったわけです。

実はいしのまきNPOセンターというNPOを支援する団体がありまして、私、そちらの理事もさせていただいて、コミュニティビジネスというと

ころまで視野を広げていかないとNPOは成り立たないということを学びました。そういうこともあって、企業的な感覚を持って、80名ぐらいの個人あるいは団体でNPOを設立したという経緯があります。

「石巻から元気な地球を次世代の子どもたちへ」という理念のもとで、自然環境と生活環境が共生する社会を目指していろいろな事業をやっていこうということで、設立当時は4部会制をとっていました。

(資料4) その中の一つが「EM環境浄化事業部会」で、EMという微生物を使って臭いを取ったりヘドロを分解したりしていこうというものです。こちらを向いて、にこっと笑っている、ちょっと頭の薄い男性がいます。先ほどの船が乗っていた内海橋の反対側のたもとでお米屋さんをやっていた、この事業部会の部会長で、大変真面目な方でしたが、残念ながら津波に流されて亡くなりました。

(資料5) もう一つが「心の森・元気の海プロジェクト部会」です。『大河の一滴』という五木寛之さんの本を読んだ方がいらっしゃるかと思いますが、「命の源は水に始まる。山に降った雨が川になり、森の栄養を海に流し、それが生き物を育てる。また蒸気となって雲になり、山に雨となって降る」、そういう命の循環を表した大きな名前の部会ですが、植林とか、山村と漁村の子どもたちの交流会、体験学習などで自然を学び、ふるさとの自然環境を元気にする活動を主にやっています。森林組合さんにご協力いただいて、大きな重機を使って木の伐採をしているところを見学させて貰ったり、伐採された木で炭を作る体験しています。

「地域資源の利活用と新エネルギー開発事業部会」では、まず始めに勉強会としてやったのが「菜の花プロジェクト」です。滋賀県の琵琶湖が汚れて、その水を浄化するために始まった運動で、菜の花を植えて菜種油を採り、その油を食用にし、廃油をディーゼルエンジンの燃料にすることで、出来るだけ自然環境に負荷をかけない循環型社会を作ろうという考え方ですが、その活動をまねて石巻でもやってみようということで、石巻の水産加工業者さんがてんぶらとか油揚げなどを作るときに使った油を循環して、ディーゼルエン

ジン用のバイオエネルギーを作る、その事業化支援もやりました。

市民農園も30区画ぐらいあったのですけれども、運営するのが大変で、今はありません。入居された方に「どうぞ好きなように使ってください」と言うと、初めはいいのですが、そのうち畑が荒れてしまう。結局こちらが草取りしなきゃならないとか、使用料をいただく以上に経費がかかる。それでも4~5年は運営して、収穫祭とかいろいろ楽しい思い出したのですけれども、それも負担になってきて、震災前に廃止しています。

石巻市は旧石巻市と6町が合併してできた市ですので、合併当初、合併特例債が使えることになりました。新しく合併した市町村が一体化できるような事業に対して、その合併特例債を使って助成金が出るというアナウンスがありましたので、うちの団体の活動を見ていただいたところ、市役所の方から「300万円、何かに使ってくれませんか」というオファーをいただきました。

そこで、我々のやりたい事業の1つとして考えていた「ふるさと知図帳」というものを事業化しました。チズ帳のチが「知」になっているのは、石巻の歴史とか自然、地図に落とせるものは全部地図に落として、もっと新しいふるさとを知ろうと言う意味です。A3版25ページぐらいで、いつでもコピーできるように、綴じるところを取り外しできるかたちになっています。

「ふるさと知図帳」の周りには写真が、合併前の旧市町村の写真です。震災前の写真ですが、子どもたちが海で遊んでいるところもありますが、実はここも今は津波で水没しています。これを700部作りまして、小中学生の資料として市の教育委員会を通じて配布させていただきました。

(資料6) これは中身の一部で、新しい石巻市ではこんな魚が捕れますよというのを地図にしています。石巻というのは魚の多く捕れるところで、全国2位、3位の漁獲高のものはいっぱいありますし、穴子は多分全国1位だと思います。

知図帳作りでは非常に労力を使って頑張った人もおまして、旧市町村の地域ごとに電話帳から何千という苗字を全部カウントして、どこの地域にどの苗字が一番多いかプロットしてみたところ、我々が石巻で一番多いと思っていた「阿部」

さんは意外にトップではなかった。こんなことも面白がって楽しみながらやっています。

あるいは、石巻の歴史を調べていったところ、石巻は牡蠣の一大産地ですが、地元の人はそれほど牡蠣に愛着を持って目を注いでいませんでした。しかし、沖縄の宮城新昌という方が石巻の万石浦で垂下式という養殖法を開発されて、しかも特許を取らなかったのが、石巻漁協の方々がその養殖法を教えながら全国に種牡蠣を販売していったという歴史があることが分かりました。

たまたまうちの団体の副代表のお父さんが漁協の組合長をされた方で、当時92歳でしたけれども、今ならなんとか間に合うかもしれないから話を聞いてみっべということになりまして、彼の事務所でそのお父さんと会いました。そのとき初めて宮城新昌さんという名前を聞かさせていただきました。「宮城新昌さんは、どんな方だったのですか」と聴くと、「いやあ、俺たちにとっては神さまみたいな人だ。牡蠣の養殖法を教えてくれて、牡蠣養殖の土台を作った、石巻の牡蠣は宮城新昌さんから始まったんだよ」ということを我々に伝えてくれたのです。

ここに「ふるさと再発見事業 第2弾」とありますのは、次の年にまた石巻市から300万円の予算を付けてもらいまして、「ふるさと知図帳」の発展形として、石巻の産物のことを取り上げる事業に取り組みました。テーマとしてカキの養殖法をについて調べて、冊子とDVDにまとめる事になり。その資料作りを業者に依頼すると同時に、インターネットで「宮城新昌」と入れて検索しましたら、なぜかすぐに「料理の鉄人」最近再会した「アイアンシェフ」の前身の番組に出ている岸朝子さんのお名前がヒットしました。驚いたことに岸朝子さんは宮城新昌さんの娘さんだったのです。早速連絡を取って「何か資料はございませんか」と言ったら、持っていらっしゃるお父様の資料を全部我々に提供してくれました。牡蠣がアメリカに渡った歴史とか、世界の牡蠣の8割は石巻の種牡蠣にルーツがある事だとか、そういう事実を沢山教えてもらったのが平成18年です。

そんなご縁もありまして、それからずーっと岸朝子さんには石巻の観光大使をやって頂いたり、イベントや支援活動にも継続的に参加していただいております。

それでは震災後、我々の団体がどんな活動をしてきたか、メンバーが実際にどんなことをやったかお話ししたいと思います。

まず私から話をしなければなりません、本業の畳屋の仕事にかかりっきりで、私自身のNPO活動はほとんどできていませんでした。

これは北上運河で、仙台では貞山運河と言うのですが、伊達政宗が米の運搬のために掘った人工の運河です。真ん中に見えているのはお寺の本堂の屋根で、後ろの森の陰にあったのが、津波に流されて運河に浮いている。私は畳屋という仕事柄、ここの住職さんと親交がありましたので、大丈夫かなと思ってこのお寺を見に行ったときに偶然撮った写真です。

このお寺は震災の前の年の夏に本堂の隣に庫裏会館ができました。住職さんは津波が来るのを知っていたはずなのに、その会館にずっとおられて、津波とともに流されてしまった。こういう身近な話しはいっぱいあります。

震災後できた仮設住宅で、鉄板でできたプレハブの長屋ですから、隣の電話は聞こえるし、くしゃみも聞こえる。神戸の震災のとき使われた建物の仕様をそのまま持ってきていますから、寒さ対策は全くない。床下の水道配管は冬には凍って爆発しましたし、壁は鉄板1枚ですから寒くて生活できない。床には本来は畳が入っていたはずですが、畳の代わりに12mmのベニヤと薄いカーペットが敷かれているだけ。その上に布団を敷いて寝られるはずがありません。零下12度から14度という地域で、風も吹き込みます。この寒さ対策に10月末からかかりっきりで、私のNPO活動は全くできない状況でした。

右下隅にあるのは私が自分で運転していた車です。とにかく仮設住宅に畳を納めることに一生懸命で、ピークには居眠り運転で、時速100キロで堤防から飛び下りました。それぐらい自分自身も追い込まれた状況でした。友だちには自虐的だと言われますけれども、ちょっと皆さんに紹介させていただきます。

これも岸朝子さんにご紹介いただいた縁で始まった関連事業ですが、函館に「バル街」という飲食イベントがあります。函館の街中で飲食店さんが飲み物と食べ物を一品ずつ提供するイベントで、石巻でもそれをまねて同じようなイベントを

3年ほど続けておりました。その都度、我々の作ったポスターを送っていたものですから、震災後、函館バル街の方から「ぜひ復活でやりませんか」というお声がけをいただいて、実際に函館から石巻に応援に来てくれまして、43店舗ほど参加してイベントを開くことができたわけです。

そのお礼として、我々が今年の春、函館に行っただけで出店してまいりました。そのときに石巻の食材として提供したのが、カキと、ささかまぼこ、黒く見えるのはワカメです、それと牛タンつくねという被災企業が作ったものです。これを飲み物と一緒に提供するというのを函館に10名ほどで行ってやってまいりました。

函館バル街も80ぐらい出店されて、5枚のチケットを4000名に販売されています。食数にすると2万食を80店舗で提供するというイベントです。その規模は我々あまりピンと来ませんでした。それでも行ったらなんとかなるだろうと思って、700食用意したのですけれども、朝8時から用意を始めて、実際スタートしたのは11時ですが、夜の8時まで、トイレに行くひますらないほどでした。我々は宿代だけバル街から提供していただいて、後は全て自費でお返しとしてやって来しました。唯一私ができたボランティア活動はこれぐらいかなと思います。

次はうちの事務局長の川村久美さんです。水色の服を着た方ですけれども、彼女はいろいろなことをしていました。

被災地を支援する団体が石巻にもたくさん来ていただきました。その中で、活動拠点が欲しい、どこか探してくれと、NGOの方に依頼されたそうです。彼女の本業は不動産関係で、アパートを貸したり土地を貸したりという仕事をされているものですから、じゃあ我が家を提供しましょうと、自分の家の空いているところを貸して、そのNGOの手伝いまでやってしまった。

自宅の物置や納屋を貸したところ、彼らの住む部屋や炊事場、あるいは支援物資の置き場所になったりしています。

被災者は仮設住宅に住んでいる方だけではありません。借り上げアパートをみなし仮設といって、家賃を払ってもらって、そこを自宅にしている方もいらっしゃるいました。仮設住宅は住環境が悪いので、それよりは自宅の方がいい。1階は

水没したけど、2階は住めるだろうとって自宅に帰った方もいっぱいおられます。

その方々が困ったのは、支援情報がないことと、支援物資も来ないことでした。仮設住宅にいれば、情報は得られるし、いろいろな団体からまとまった支援がいっぱい入ってくるのに。自宅に帰ったとたん、まず情報がない。自宅にいても、1階は水没して、布団もない、服もない。ご飯も炊けない状況なのに、支援が全くないという状況だったわけです。

川村さんたちはそこをなんとか支援したい、まず人が集まりやすい場所を提供しようということで、街の駅「おちゃっこ」を開設しました。「おちゃっこ」というのは、石巻の方言で、お茶を飲む、一服するという意味です。そこでいろいろなイベントを催して、少しでも集まりやすい環境を作るということを継続して実施されています。

(資料7) もう一つ川村さんがやったことはTシャツ作りです。去年、楽天球団の製作したポスターの書で「真つすぐ」という文字を書いた千葉蒼玄先生に、ぜひ石巻復興のためにTシャツに書を書いて欲しいと依頼をして、その書をプリントしたTシャツを作り、被災地を撮影した写真も提供してもらって絵はがきも作りました。これを被災地で販売して、最終的には市に300万円寄付するだけの売上をしています。NPO活動というよりも、本人の気持ちでやった、やりたいという気持ちが先に立ってやったと言っていました。

斉藤義樹さんの本業は神社の宮司さんですが、EM事業部会の流れをくんだ「いのちの底力プロジェクト」で、EMを使って川の浄化や浸水した家の床下の消臭をやっています。

当初、どんな使い方をするか全く計画もなしに、彼はまずEMの培養を始めたそうです。培養原液から100倍、1000倍に増やし続けていたら、震災前から交流のあったEMの本部や県外のいろいろな支援団体から「何かできることはないか」という問い合わせが彼のところに来て、被災地支援者と被災者のコーディネーター役を担うことになった。種菌を培養していたのが非常に役に立ったという話でした。

EMだんごは昔、NHKで道頓堀川の「元気玉」として紹介されたことがあるんですけども、EMを泥にまぶして発酵させて、白いカビ状の

ボールにする。それを川に投げ入れると、ヘドロを分解して川を浄化する、そういう作用があるわけです。「おちゃっこ」に集まってくる人たちも、何かしていた方が気が紛れるとって、EMだんごと一緒に作ってくれました。

浸水した住宅の床板を剥がして、床下の消臭のためにEMを撒布しているところです。全戸やればいいんですけども、余りにも数が多過ぎて、実際にやれたのは多分70戸ぐらいではないかと聞いています。

一次避難所が狭く、もう少し広い場所を使いたいということで水没した中学校の体育館に移ったら、水は引いたとはいえ、あまりにも臭いがひどい。なんとかしてほしいという要望を受けて、そこにEMを撒布しに行ったこともあるそうです。

これが1トントクのEM培養器です。この1トントクからEMを流して川の浄化もしました。

EMというのは「有用 (Effective)」と「微生物群 (Microorganisms)」を組み合わせた「有用微生物群」の略で、開発者である琉球大学の比嘉先生によって名付けられた造語です。これはどういう効果があるのかというと、腐る菌と発酵する菌と2種類の菌があって、これを善玉菌と悪玉菌と言いますがこれはそれぞれ1割ずつしかなくて、間の8割の日和見菌はその綱引きで力の強い方につく。善玉を大量に流し込むと、悪玉が負けて善玉が増えて腐敗菌を駆逐する。そういう構図があるというのを琉球大学の比嘉照夫教授が偶然見つけて、これをEMの力だと言っておられます。あくまで経験則で、学術的な裏付けはほとんどないそうですけれども、実際に効果があるので、やったもの勝ちだ。一生懸命培養して流し込めばいいことがあるだろうというわけです。

白いボールのように見えますが、だんごに白カビが発生して善玉菌のかたまりになる。震災前、近くの小学校でも同じことをやっていた、この持っているEM泥だんごを近くの川に投入するという活動も実際やっていた。そのときの写真です。

(資料8) これは何だと思いませんか。EM泥だんごを投入した場所を、私の通勤の途中、毎日写真を撮っていたところ、たまたまこういう写真が撮れました。比嘉先生もこの光景は見たことがなかつ

たそうですが、真ん中にあるのはEM泥だんごで、赤いのはイトミミズです。善玉菌によって腐敗したものが栄養素に生まれ変わって、それをえさにするイトミミズが発生する。イトミミズをえさにする小魚が発生して、その小魚をえさにする鳥が集まってくる。こういう循環が生まれて、どんどん環境が改善されていく。疑いようのない経験則として、「やっぱりEMってすごいね」と再確認したわけです。

中里川という石巻市内で一番汚い小川で、震災前、この川を浄化しようとしたんですが、下流に田んぼや畑があって、できませんでした。震災後、下流は全部流されて、汚い川たけが残った。

下流の心配が無くなったので、ここにEMを投入したところ、黄色く濁っていたのが、このように透き通ってきました。

泥だんごを投入して3ヵ月ぐらいの短い期間で、水の上を泳ぐアヒルの足も見えるぐらいまで澄んでいます。

我々の団体は震災後、新たなメンバーを募集することができませんでしたので、外の団体の力も借りて、従来からいるメンバーは外部団体のコーディネーター役が主な仕事になっています。その中でできる仕事を分担して、自分から率先して「こんな仕事だったらできるかな、このくらいならできるかな」ということを積み重ねてやっています。

震災当初、10人がカップラーメン1つで過ごしたという一次避難所もありました。その後、山崎製パンさんが毎日菓子パンを支給してくれるようになりましたけれども、どんなにお腹が空いても、さすがに3食菓子パンというのは辛いんですね。

そういう状況の中で少しでも被災者の方々の食生活に変化をということで、鈴木美智子さんは「つながる炊き出し隊」を作られました。県外の方々からも「食材を持って石巻に炊き出しに行きたいけど、どこでやったらいいですか」というようなお問い合わせをいただいて、「じゃあご案内しましょう」という、そんなノリで始まったようです。

被災地の支援ニーズは徐々に変化してきます。食べ物が欲しい、着るものが欲しいから始まって、心の支援をしてほしいとか、いろいろ要望が

出てきます。その都度その都度、それに合わせてできることをやっていくことになります。

震災後1ヵ月目ぐらいには、自衛隊がお風呂を持ってきてくれました。住民の方々が入れるお風呂を設置してくれたのですが、7~8ヵ月ぐらいで自衛隊が引き揚げてしまった。その後、地域の方々からの新たな要請を受けて、外部のNPOとかNGOの方々の力も借りて、お風呂の出前もやりました。

地域の方々が集まる場所として、先程「おちゃっこ」を紹介しましたが、1つでは足りないので、2か所目に「ハピネスサロン 浦屋敷」を10月に開設しています。

左上は手伝ってくれた外の団体との集合写真です。この方々の協力で、芋煮会をやったり、ゆずを使った料理教室、書道教室、男のそば打ち教室、クリスマスリース作りとか、いろいろ楽しい企画もやっています。

この地域の人たちは、自分だけが助かって家族が目の前で亡くなったとか、2階に逃げて下を見ているときに、車が流れてきた、人が流れてきた。そんな情景を見て、それでも自分の家に住んでいたい、あるいは自分の家の跡地でバーベキューをしたという方もいるし、逆に二度とここに住みたくないといって離れていった人もいます。同じ被災された方々の心情にもかなり幅があるということです。支援も一概に決められないというのが我々の実感です。

先程見ていただいた仮設住宅の内部です。押し入れと部屋しかなくて、物を置くにしても棚がない。これまで漁村部の方々は家族一人、二人で部屋が7つも8つもある。どんな音を出そうと、カラオケをしようと、隣まで響かない。そんな生活をしてきた方々が、狭い仮設住宅に入られる。

私も畳を持っていきましたので、どんな生活か、現状を目の当たりにしていますけれども、支援物資を山のようにため込んで整理がつかなくなっていたり、押し入れの下に布団を敷いて寝ていたり、千差万別でした。

そういう生活環境の改善に少しでも役立ちたいということで、収納棚の設置をしました。チラシを作って展示会をして、こんなことができますよという案内をしたうえで希望者を募り、部材も人も外部の方々に支援いただいて作業するという活

動をしたわけです。

このような活動をしているうちに、市役所から被災地域の住民への土地利用説明会が有りその構想概略図が出されました。青い線は新設の道路、赤い線は堤防、この土地は今後このように利用していきますよという案が住民の方々に提示されたわけです。ここに住んでいた方々がどう思っているか全く聞かずに、あくまで市が主体となって、市の考えで作ったものです。

(資料9) これに対してどうするか考える場所を提供することを思いついた方がうちの団体の中におられまして、11月26日「みんなで考える課題と未来」という話し合いが釜地区で持たれました。

手を挙げて喋っている人の「いや、ここで喋っても、誰も聞いてないし、どこにも通用しないでしょう」というところから話し合いが始まったのです。私はNPOの団体の者だなんて言わないで、住民のふりしてそこに座っていたんですけども、できるだけ住民の方々の声を引き出そうと思って、「いや、そんなことないですよ。今ここにこうやって支援者の人も来ているし、自分が思ったこと、考えていることを口に出せば、誰かに届きますよ」という話をさせてもらいました。たまたま翌々日、地元の新報に自分の姿も写っていたので、彼は多分納得してくれたらこうなと思います。

この会を催したときに、ぼつんぼつんと点在している家の人たちが20人以上集まってくれました。これは多分、ハピネスサロンとかおちゃっこで人のつながりがちゃんと出来ていたからこそ、こんな集まりができたし、新聞記事にもつながっていったのだろうと私自身は感じております。

話があっちこっちに飛びますが、最初に紹介した南浜町の人たちは、ここを人が来ない場所にして欲しくない。鎮魂の森も困るし、ただ単に森になってもらっても困る。ちょっとはぎやかな、人の集まる場所になって欲しいと言うのです。その言葉もすごいなと思います。

私は実際に建物が無くなったわけでもないし、家族が亡くなったわけでもないけれども、被害を受けた人がそんな風に言うのを聞くと重いなと思いますし、住んでいた人たちの気持ちをどうやって吸い上げたらいいのか、もっともっと考えな

きゃいけないと思っています。

2~3日前の新報に、今度市役所主催で、住民団体、NPO団体、企業の方々の意見を吸い上げる会を設立すると載っていました。私にはまだ声がかからないので、もしかしたら我々には声がかからないかもしれませんが、実際住む人たちの声をどうやって届けたらいいのか、これから手伝っていかなくゃいけないかなという気持ちもあります。

次に被災企業の動向とこれからの役割について話をさせていただきます。

(資料10) ここに写っている松本俊彦さんという方は印刷会社の3代目社長で、「街づくりまほう」という街中を活性化するために作った第三セクターであり、萬画館を運営するために作った会社の取締役もしています。自分の会社は被災して、奥に見えるのは会社の中に突っ込んできた車です。この状況で、彼の顔を見てください。もう笑うしかないんですよ。彼は絶望を味わい尽くして、「もうどうしようもない。こんなところ復旧できるわけがない。でも、カメラ向けられると笑うほかない」と言っていました。

そこから立ち上がる気持ちを持って新たな動きを始めたのが石巻元気復興センターという団体の代表という活動です。当初は被災した地元の中小企業の代表の人たちを集めて、支援してもらおう。支援のいろいろな方法を聞くためにも、「センター」とした方が呼びやすいだろうということから始まったようです。だから、インターネットで「石巻元気復興センター」と入れると、「うちはこんな被災をしました。復旧するのに何億かかります。なんとか支援してください」、そういうメンバーの動画が5、6本、いつでも見ることがができますので、機会があったらご覧になってください。

石巻の被災企業にもいろいろあります。震災前に利益を出して体力のあるところは、移転したり新築工事で新しい工場を作って、人も被災前と同じぐらい雇用して事業を継続しています。しかしそれはごく一握りで、被災企業1000社ぐらいのうち、あっても10社とか20社程度です。

それ以外の企業はグループ補助金を活用しようとしてました。グループ補助金というのは被災企業

を支援するための国の制度ですけれども、貰うには、全体の事業費の2割か3割は自費で用意しなければいけない。

たとえば年商2億の工場が、長年かけて機械を何十台も入れて、やっと自分の年商ぐらいの建物ができる。それが被災してグループ化補助金をもらうには手元資金が4000万要る。2億の年商で4000万の余剰資金なんか、皆さん大抵持っていない。自分が蓄積してきた工場を担保に運転資金を借りてやっと仕事をしているというのが、おそらく震災前の状況です。

その状況でグループ化補助金をもらうために2割の現金を用意して工場を立ち上げた。しかし、もともと体力がなくて、競争のためには薄利多売せざるを得ない人たちですから、競争相手も多い。元の規模に復旧するまで売り先もなんとか待っていてくれるだろうと思って無理をして復旧して、いざ売りに行ったら別のところが自分の商圏を奪ってしまっただけで誰も買ってくれない。被災して工場を立ち上げるまでの間に売り先もなくなって、残ったのは復旧した工場だけで、1年もしないうちに倒産する会社が出てきています。

松本さんはそこまで悲惨ではなかったけれども、得意先も被災して売上も10分の1になりました。この状況で工場を元通り復旧していいのかという疑問を持って、注文だけはもらって、印刷は仙台の印刷屋さんを手伝ってもらう。そういうことをやっているうちに、自力で立ち上がっていかないと、なんともならないことに気づいたので。

当初は、自分の会社が主体となって、水産会社や醤油屋さんやいろんな企業と一緒に「なんとか皆さん、支援してください」というお願いをしようという団体だったはずなのに、自分たちで利益を確保するにはどうしたらいいかという考えに変わっていった。自分たちの持てる力を持ち寄って、新しい石巻の産物を作っていく。体力がない、売り先がバッティングするというのは、スーパーやデパートの下請で、自らの商品力が弱かったからだ。そこを打開するために、自らのブランドを作ることに目を向け始めて、その中から出てきたのが「日高見の国」というブランドです。

実はこれは震災前に作られたブランド名で、川村さんの前にうちの事務局長だった人が「日高見

の国」というブランドを持っていました。彼はガソリンスタンドの社長でしたけれども、震災前の不況でガソリンスタンドをやめて水産会社の社長と出会って、そちらの仕事を手伝うようになり「日高見の国 牡蠣味噌」というのを作りました。昔、石巻は日高見の国と言われて、これが北上川の語源になっているという話もあります。盛岡から流れてくる東北一番の大河をもとに、「日高見の国」というブランドを作ったわけです。

当初は牡蠣味噌の3種類の瓶入りの商品を作って、これを売り出すことから始まったのですが、ここには松本さんたちが加わって、わかめ屋さん、鰹節屋さん、味噌屋さん、魚の加工屋さん、それぞれの店ごと、企業ごとに、日高見の国ブランド商品を作ることになりました。

作った商品をどこで売るか。震災前から自社ブランドを売るルートを持っている人も中にはいます。これは物産展で「俺たちは頑張るぞ」と氣勢を上げている写真ですが、このように物産展に乗り込んでいく人もいます。被災地支援としていろいろなところから声がかかりますので、そこに出続けている企業もあります。なんとか被災地を手伝いたいという人たちも各地にいっぱいおられまして、「日高見の国ブランド」の販路も広がって、1割だったものが2割、3割と伸びてきています。

萬画館が今月の17日にやっと再オープンしましたけれども、それまでも被災地ツアーのバスは毎日何台、何十台と来ている。その方々を街中に少しでも呼び込もうということで、「街中復興マルシェ」を作りました。物産を売るだけでなく、街中に残った人たちの買い回り品も売っている場所です。

元気復興センターももちろん出店しています。

鰹節や、わかめや、それぞれが作った商品を販売しています。地元の中小企業も頑張っている姿をこれで分かっていたきたいと思います。

我々の団体は今年どんな活動をしてきたか、今後どういう活動をしていくのかという話をして終わりにしたいと思います。

瓦礫の山の処分について、日本全国に協力を呼びかけていますけれども、地元の人間としては、できれば外の人たちに迷惑をかけないで、我々で処分したいと思っています。そんな気持ちもあっ

て、8月23日、瓦礫堤防を提唱されている横浜国立大学の宮脇昭先生に来ていただいて、石巻専修大学の森口記念館で200名ぐらいの方を前に講演をしていただきました。写真を使った分かりやすい説明でした。

その後、我々の団体で会合を持ったのですが、現実には瓦礫堤防は難しいようです。昔は埋め立て地に何でも埋めていましたけれども、今はガスが発生するとかいろいろな問題があって、瓦礫と一緒に土に埋めることは環境省が禁止しています。したがって、瓦礫堤防は難しいけれども、今後いろいろな可能性を探っていくときに、地域

の方々と我々NPO団体が一緒になって方向生を考えていきたいと思っています。

これも川村さんのコーディネートで、フランスの団体やいろいろな会社が費用を出してくれて、お寺さんの敷地内に「寂光の森プロジェクト」による植樹を行ないました。

これまで申し上げましたように、NPO法人いしのまき環境ネットは地域と住民に寄り添って、地域に役立つ新たな課題を常に創造しながら、これからも活動していきたいと考えています。

つたない話でしたが、以上で終わります。

資料1

被災前の中心市街地



資料2



資料3



資料4



資料7

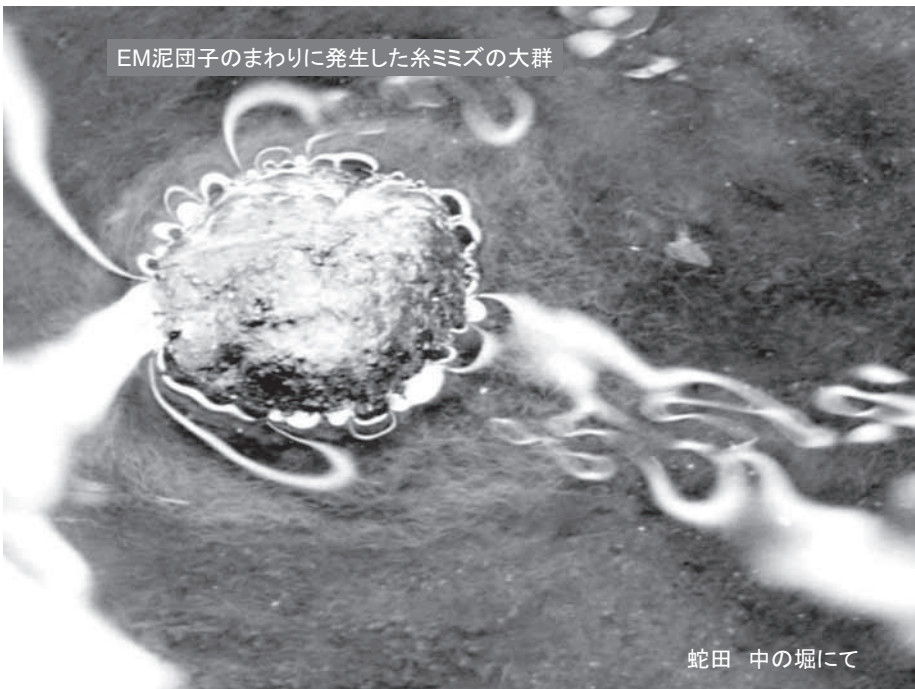


Aタイプ

Bタイプ



資料8



資料9

11月26日
みんなで考える 課題と未来



高盛土地区の道路復旧は、被災者にとって切実な課題となっている。環境ネットと連携し、ワークショップを開催し、課題抽出を行った。高盛土地区の道路復旧は、被災者にとって切実な課題となっている。環境ネットと連携し、ワークショップを開催し、課題抽出を行った。高盛土地区の道路復旧は、被災者にとって切実な課題となっている。環境ネットと連携し、ワークショップを開催し、課題抽出を行った。

資料10

松本俊彦さん



(株) 松 弘 堂 代表取締役 (3代目)
 (株) 街づくりまんぼう 取締役
 (石ノ森萬画館運営会社)
 株式会社 石巻日日新聞社 取締役
 (社)石巻元気復興センター 代 表